

ひょうごの福祉

つながりで笑顔輝く 共生のまちづくり

特集

県民ボランティア活動の
さらなる充実を目指して
～ひょうごボランティアプラザの
取り組み～

年頭所感

笑顔輝く 共生のまちづくり
あなたのまちの福祉活動
キラリ★社会福祉法人
県社協TOPICS

手軽に読める
「ひょうごの福祉」
WEBサイト



歴史ある古い街並みと
新しいスポットが
融合した城崎温泉。
外湯めぐり発祥の地で
7つの外湯を楽しめるよ。
(豊岡市)

ふくみ
福美ちゃん

ひょうた
兵太くん

ふくさん

2024

1-2

No.851



この機関紙は赤い羽根共同募金
配分金により発行しています。

年頭所感

〃ほっとかへん〃ですすめる
共生のまちづくり

兵庫県社会福祉協議会 会長

入江武信



新年あけましておめでとうございます。

県民の皆さまにおかれましては、日ごろから地域福祉の推進にご尽力を賜り、心より感謝申し上げます。今年も辰年なので、これまで努力してきたことが実を結ぶ一年にしていききたいと思っております。

さて、全国的に、地域共生社会の実現やSDGsの目標に向けた包括的な支援体制づくりが進められています。長期化したコロナ禍の影響に加え、物価の高騰が重なり、社会的孤立や生活困窮の課題はさらに深刻化しています。少子高齢化、地域社会の衰退、災害支援などに対しては、新しいつながりや地域づくりが求められています。

県社協では、市区町域で社会福祉法人が連携して取り組む「ほっとかへんネット」の活動を支援し、制度の狭間で支援が届きにくい人々の暮らしを支え、地域の実情に応じた多様な取り組みを全国的に推進しています。

また、市区町社協に「ほっとかへんネットワーク」を配置し、生活に困窮する世帯への相談支援と地域のセーフティネットの充実を目標に活動を展開して参ります。

県社協「2025年計画」では、基本目標として「つながりで笑顔輝く、共生のまちづくり」を掲げ、地域社会とのつながりの中で、自分らしく生活が送れるよう、地域共生社会の実現と大規模災害に備えた協働の取り組みを、市町社協、民生委員・児童委員、社会福祉法人、行政、NPOなどのさまざまな主体と協働して進める所存です。互いに支え合うことで、一人一人が自分らしく暮らしていけるよう、〃ほっとかへん〃ですすめる共生のまちづくりを一緒につくっていきましょう。

皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。新年のごあいさつとさせていただきます。

兵庫県社会福祉協議会

役員一同

会長

入江武信

(兵庫県社会福祉協議会 会長)

副会長

田口勝彦

(丹波市社会福祉協議会 会長)

谷村誠

(兵庫県社会福祉法人経営者協議会 会長)

大江秀謙

(兵庫県民生委員児童委員連合会 会長)

玉田敏郎

(神戸市社会福祉協議会 理事長)

常務理事

尾山健司

(兵庫県社会福祉協議会 常務理事)

理事

水田宗人

(西宮市社会福祉協議会 理事長)

萩原絹夫

(小野市社会福祉協議会 会長)

秋山紀史

(神河町社会福祉協議会 会長)

伊藤宣廣

(朝来市社会福祉協議会 会長)

廣地タマヘ

(洲本市社会福祉協議会 会長)

兵庫の新たなステージへ

兵庫県知事

齋藤元彦



新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、社会経済活動が正常化しました。その一方で、物価高騰や円安は依然として私たちの暮らしに影響を及ぼしています。

こうしたなかでも、阪神タイガース、オリックス・バファローズ、ヴィッセル神戸の活躍は、私達に感動を与え、地域に元気をもたらしてくれました。

選手達のはつらつとしたプレーのように、令和6年の県政も、だれもが夢や希望を持って挑戦できる社会をめざし、「攻めの県政」を展開する一年にしたいと思います。

まずは、若者・Z世代への支援です。

兵庫県立大学・大学院の無償化や奨学金返済支援の拡充など、結婚・出産のハードルにもなっている教育費の負担を軽減します。また、海外への留学等を支援し、国際視野を得る機会を広げます。保育・子育てサービスの充実、不妊治療支援や若い世代に向けた住宅支援の充実など、兵庫で子どもを生まれ、育てたいという希望を叶える環境づくりも進めます。

高齢者や障害のある方たちが安全安心に暮らせる「共生社会」を実現します。

特殊詐欺被害が過去最悪のペースで増加するなか、被害者の8割を占める高齢者を被害から守るため、全国一の規模で集中的に対策を強化します。自

転車ヘルメットの購入支援を行い、自転車死亡事故の減少につなげます。また、年齢や障害の有無に関わらず安心して旅行ができるユニバーサルツーリズムや、パラスポーツの普及に取り組みます。団塊世代のすべてが後期高齢者となる2025年を見据え、健康づくりや地域医療構想の推進にも注力します。

地域のポテンシャルを活かし、兵庫の持続的発展につなげます。

人と環境にやさしい農業、革新に挑む地場産業、地域に根付く芸術文化など、兵庫各地の人々の営みには、世界が持続可能な発展を遂げるための多くのヒントがあります。大阪・関西万博を機に、こうした現場に国内外の人々を誘う「ひょうごフィールドパビリオン」の取組を加速します。また、脱炭素社会実現の鍵となる水素エネルギーの活用や、有機農業の拡大に向けた担い手育成など、持続的な成長を支える取組を先導します。

県政推進にあたり、現場主義の徹底と対話重視の姿勢に変わりはありません。これまで以上に、現場に足を運び、地域の皆様との対話から出てくる課題やニーズを積極的に施策に反映していきます。

兵庫の新たなステージに向け、果敢に取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

大畑 和典

(兵庫県民生委員児童委員連合会 副会長)

坂本 津留代

(神戸市民生委員児童委員協議会 理事長)

伊達 恵一

(兵庫県保育協会 会長)

藤澤 徹

(兵庫県老人福祉事業協会 会長)

松端 信茂

(神戸市社会福祉協議会施設部会 部会員)

西田 勉

(神戸YMCA 常勤理事)

木村 佳史

(兵庫県身体障害者福祉協会 理事長)

多村 孝子

(生活協同組合コープこうべ 常務理事)

片山 安孝

(兵庫県副知事)

小西 康生

(神戸大学 名誉教授)

松端 克文

(武庫川女子大学 教授)

三宅 由佳

(税理士)

監事

松原 一郎

(尼崎市社会福祉協議会 理事長)

古川 勝

(兵庫県知的障害者施設協会 政策委員)

松山 康二

(公認会計士)

県民ボランティア活動の
さらなる充実を目指して
ひょうごボランティアプラザの
取り組み

阪神・淡路大震災における救援・復興活動の中で広がったボランティア活動はその後、さまざまな分野に広がり、地域生活や災害時にはなくてはならない存在となりました。

今回の特集では、それらの活動を支えてきた、ひょうごボランティアプラザの取り組みについてお伝えします。



写真右上から

災害ボランティア活動

ひょうごボランティア地域づくりネットワーク会議の様子

ぼっかぼか共生マラソンの様子（認定NPO法人ぼっかぼかランナーズ提供）

健康サポート・あいとわの会による太極拳体操（プラザセミナー室にて）



田端和彦 兵庫大学副学長

最近のNPOやボランティア活動の動向

以前は、法人格を有して自由な社会貢献活動を行うには、NPO法人は重要な選択肢でした。特に、平成10年のNPO法^{※1}制定後しばらくの間は、震災復興における様々な課題解決のため、県内のNPOが急速に拡大

ひょうごボランティアプラザ(以下、プラザ)は、阪神・淡路大震災を契機としたボランティア活動の広がりを受け、平成14年6月に兵庫県が県民ボランティア活動を支援する中核拠点として開設したもので、その運営は兵庫県社会福祉協議会が行っています。

阪神・淡路大震災から30年近くが経過し、ボランティア活動を取り巻く環境が大きく変化する中、最近のNPOやボランティア活動の動向、プラザの果たしてきた役割や期待について、兵庫県県民生活審議会会長でプラザ運営協議会委員でもある田端和彦兵庫大学副学長に、お話を伺いました。

しました。

しかし、最近では、一般社団法人など他の法人格を取得して活動する団体や、介護保険等の公的資金によって運営される事業型のNPO法人が増えています。

また、活動面の最近の動向として、生活困窮の問題など、SDGsのスローガンである「誰一人取り残さない」ということを目指した活動を行っている団体が増えていると感じています。

ボランティア活動の動向を端的に示すのは難しいのですが、企業や学校などの活動に組み込まれたり、高齢者の「生きがいづくり」につながるものが増えるなど、活動内容の広がりや日常化が進み、以前のような「社会奉仕として歯を食いしばって頑張る」といったボランティア活動のイメージが大きく変化してきたのは間違いありません。

プラザが果たしてきた役割

プラザが果たしてきた大きな役割は、県内各地に中間支援組織^{※2}を育ててきたことです。プラザが開設された当時の参画と協働というのは、行政と民間の間に中間支援組織があるとの感覚でしたが、プラザ自身が中間支援組織としてNPOとNPO、NPOと市民を結び付けてきました。また、このような観点で中間支援の必要性を訴え、県下に多くの中間支援組織を育成しました。

加えて、プラザはコミュニティで活躍する団体やグループへの支援を通じて、地域の底

力をすくい上げる役割を果たしてきました。本来、市町の役割というご意見もあるかもしれませんが、全県域においてあまねく平等に団体への支援活動を行い、特定の分野に偏ることなく県域全体でコミュニティ活動を促進してきました。

また、これら中間支援組織やコミュニティで活躍する団体等の活動支援と、災害ボランティアバスの運行や市町の社協が担うことので多い災害ボランティアセンターの運営を行うコーディネーターの育成などの災害支援活動を結び付け、地域に「災害の備え」の考えを根づかせ、いざという時の受援力を高めるといった役割を果たしてきたことも、災害を経験した兵庫らしさを活かしたプラザの大きな役割と言えます。

プラザへ期待すること

海外の事例に接していると、いろいろな課題に立ち向かっているNPOがあります。とりわけ、多くの課題を抱える開発途上国などではNPOが地域住民の生活を安定させるアンカーとしての役割を担っている。これらのNPOは柔軟に様々な案件に対応し、「誰から見ても妥当と思われる状況を創る」という役割がある。そういう意味で、NPOの活動には大いに期待しており、プラザには、新たな課題に挑戦するNPOの創設支援や活動支援を先導的にやってほしいと思っています。幸いにして職員の皆さんが、その辺をよくご理解いただいているので、例えば、中間支援

を新しくつくるプログラムやボランティア助成とか、これまでもずっとやってこられてきたので、その姿勢はずっと貫いていただいて、兵庫県において先端的な旗頭を率いてくれることを期待しています。

※1 NPO法：「特定非営利活動促進法」のこと。

※2 中間支援組織：NPO法人をはじめとする団体の活動を支援する組織のこと。

プラザの取り組みについて

住民の暮らし方や価値観の多様化に加え、人口減少社会において、県民や地域が抱える課題も多岐にわたるなか、より良い社会を実現するため、県内のボランティアセクターはさらに力をつけ、課題解決に向けての役割を担うことが期待されています。

プラザは、県内のボランティア活動全般の全体的支援拠点として、「地域支援拠点や中間支援組織に対する支援」、「情報ネットワークの基盤強化」、「多彩な活動資金の支援」の3つの活動方針に基づき、以下の6つの柱を中心に事業を展開しています。

① 交流ネットワーク

「ひょうごボランティア地域づくりネットワーク会議」や「市町・市区町社会福祉協議会連携等会議」など、NPO、企業、大学、市町社協、県・市町など地域を構成する多様

な主体が参画し、情報収集・意見交換を行うセミナーや会議などを開催し、連携促進、各地域間のネットワークの形成を図ります。

② 活動資金支援

草の根のボランティアグループ・団体、NPO法人などが実施する活動に対して資金支援を行うとともに、助成事業実施団体が一堂に会し、意見交換により事業成果を共有する「ひょうごボランティア基金助成報告会」を開催し、活動の活性化を図るとともに、地域の課題解決への取り組みを支援します。

【助成制度】

- ・ 県民ボランティア活動助成：法人格を持たないボランティア活動団体の自立を支援するための助成（上限額：2万円/件）
- ・ 中間支援活動助成：地域において中間支援機能を担っている団体を支援する助成（上限額：50万円/件）
- ・ 地域づくり活動NPO事業助成：NPO法人等による地縁団体等と連携した、機動力・専門性などを活かした地域づくり等の取り組みを支援するための助成（上限額：50万円/件）

③ 情報の提供・相談

団体、NPOなどへの情報提供、相談の支援拠点として、専門的な資料の閲覧、印刷機器・セミナー室などの貸し出しを行うほか、メールマガジンの発行、NPO法人の設立や運営に関する相談業務を行います。

また、県内のボランティアセクターに関わる必要な情報（イベント、セミナー、ボランティア活動、助成金、活動団体の情報等）を、プラザホームページ「ひょうごボランティア」にて発信することにより活動を支援します。

④ 人材養成

ボランティア活動の担い手の拡充やNPO団体スタッフの育成支援を目的に、NPO法人の認証手続き、コミュニケーションマナー、NPOの役割などをテーマとした動画を作成し、オンデマンド方式で配信します。

また、市区町社協の災害救援支援担当者など、災害ボランティアセンターの運営に携わる者を対象に、多種多様な団体・機関と連携し、被災者中心・被災地主体の復興にむけての支援について学ぶ、災害ボランティア連携訓練や災害ボランティアコーディネーター養成研修を実施します。

⑤ 調査研究

ボランティア活動に関する社会的な課題や支援方策について、さまざまなテーマを設定し、調査研究を実施します。

⑥ 災害ボランティア活動の支援

災害時における災害救援ボランティアが最大限の力を発揮できるように、支援関係機関・団体による迅速かつ効果的な支援体制を構築するため「災害救援ボランティア活動支援関係団体連絡会議」を設置し運営します。

また、被災者の生活の早期復旧、自立を支援するため、被災地でボランティア活動を行うグループを対象に交通費等の一部を助成する「大規模災害ボランティア活動応援プロジェクト」を令和元年度から整備しているほか、東日本大震災などの被災地支援活動を行う県内の高校生、大学生、NPO等の若者を主体としたグループに助成を行う「ひょうご若者被災地応援プロジェクト」を実施します。

プラザからのお知らせ

ホームページを大幅にリニューアル

プラザホームページが令和6年1月から「コラボネットひょうご」として大幅にリニューアルしました。地域活動やNPO活動に取り組む団体、また、これらに参加する県民が、さまざまな情報を簡単に分かりやすく発信、入手することができます。

見やすさを重視してデザインを刷新し、スマートフォンからの閲覧、投稿など操作性を向上させ、使いやすいものになりました。

また、これまでの「イベント情報」「セミナー情報」「ボランティア情報」「助成金情報」に加えて、新たに「団体からのお知らせ」というカテゴリを新設しました。クラウドファンディングのお願い、調査研究成果の公表、求人情報など、団体の自由でマルチな情報を掲載することができます。

投稿するためにはプラザへの登録が必要です。また、登録いただいた団体はセミナー室などプラザの各施設を無料でご利用いただけます。ぜひご活用ください。



NPOのエンパワーメントにつながる動画を制作

県内のNPOなどの組織力強化、人材育成モチベーション向上につながることを目的に、それぞれのテーマにあった動画を作成しました。オンデマンド配信により24時間いつでも視聴いただけます。ただし、視聴いただくには初回のみプラザホームページから申し込みが必要です。(令和6年3月31日まで公開) 詳しくはプラザホームページ「コラボネットひょうご」の「お知らせ」をご覧ください。

「3つのテーマで動画を配信」

①「NPO法人認証手続き定款作成のポイント」所轄庁への認証申請において、特に書き間違いや修正が多い「定款」について、NPO法人の手引に基づきポイントをわかりやすく説明しています。
「NPO法人の手引 1 設立・運営編 (2022年3月改定)」に基づき、兵庫県県民躍動課協力のもと作成。

②「好感と信頼を得るコミュニケーションマナー」テーマ別に4編。
NPOや団体等のスタッフが、地域課題を抱える人に寄り添いながら活動を行うため、好感や信頼を得ることにつながる対人マナーの向上・心構え・コミュニケーション技術を学べる内容です。

講師：言の葉OFFICEかのん代表
川邊 暁美氏

③「NPOの役割を今一度考える」

NPOや団体等のスタッフが自団体の活動を見つめ直し、支援が必要な人や地域(社会)が幸せ(福祉)になるための活動について考える機会となる内容です。

講師：兵庫県対人援助研究所主宰
稲松 真人氏

プラザホームページ「コラボネットひょうご」は下記
のQRコードからご覧ください。





笑顔輝く

“笑顔”と“共生のまちづくり”につながる取り組みをレポート

共生のまちづくり

4月2日は「世界自閉症啓発デー」(4月2日~4月8日「発達障害啓発週間」)です。NPO法人あっとオーティズムは、自閉スペクトラム症のシンボルカラーである青色で、各地のランドマークをライトアップする啓発活動を全国に広げています。



自閉スペクトラム症の理解と支援を広げる「ライト・イット・アップ・ブルー」



始まりは神戸市内3カ所から

自閉スペクトラム症をはじめとした発達障害への理解と支援を求める「ライト・イット・アップ・ブルー」の活動は、2010年(平成22年)にニューヨークの「autism speaks」という団体から世界中に呼び掛けられました。当時、小学生の自閉スペクトラム症の子を育てていた佐伯比呂美さんは、インターネットで活動を知り、海外の世界遺産や雄大な自然が青色にライトアップされる美しい光景と啓発の手法に感動しました。

国内ではまだ実施されておらず、友人と任意団体を立ち上げ、企画書を作り神戸市内の企業に協力を求めたところ、平成23年4月に実施の目途が立ちました。

その以前の平成23年3月、東日本大震災が起きました。日本中がライトを照らすことに抵抗がある時期でしたが、「報道で発達障害の子どもがいるために周囲に気を

遣い避難所へ行けない家族がいると知りました。こんなときだからこそ応援の気持ちを伝えたい」と実施を決意。能福寺の兵庫大仏など神戸市内の3カ所が、自閉スペクトラム症へ思いを寄せてライトアップに協力してくれました。

ました。



能福寺兵庫大仏前での集合写真

全国に広がる活動の輪

活動開始時は、英語の情報しかなかったため、活動内容など日本語に訳してポスターやホームページを作りしました。また、全国各地のタワーや名所を訪問するなど、地道な活動を続け協力者を増やしてきました。厚生労働省とも連携して情報発信を続けています。

さらに、全国の個人や団体に協力を広げ、チラシや風船などの資料を送付したり、ライトアップの写真をWEBやSNSで使いや

すようにツール化したりするなどしています。神戸市内3カ所からスタートした活動は、令和5年4月には北海道から沖縄まで全国400カ所を超えて広がりました。

知ってもらいたいことで理解を広げる

自閉スペクトラム症の特性は多様で、見え方や聞こえ方など五感の一部または全ての感覚に特異性があるとされています。必要な情報を選択することが困難で、次の行動が予測できず不安の中で生活をしています。「環境の配慮や温かい見守りが、本人や家族の安心感につながります。また、早期に療育により特性を理解することで、本人が生きやすくなることもあります」と佐伯さんは話されます。今後「ライト・イット・アップ・ブルー」の活動により、自閉スペクトラム症の理解と支援を広げていきます。



昨年の啓発チラシ

取材を終えて

お話を伺い、活動の中で出会った方々への感謝の思いと一つ一つのつながりを大切にされている様子が伝わってきました。今後も全国規模で活動をしていくあっとオーティズムの活動に注目です。

NPO法人あっとオーティズム

(ライト・イット・アップ・ブルーJapan 実行委員会)

連絡先: world.happy.mamas@gmail.com

ホームページ: https://www.happy-autism.com/

Facebook: https://www.facebook.com/

LIUBJapan/



あなたのまちの 福祉活動

共生のまちづくりに
向けて市町社協が
関わるさまざまな
福祉活動を紹介します。



この活動を紹介してくれたのは

佐用町社会福祉協議会

☎0790-78-1212

佐用町社協

検索



おなかも心も満たされる子どもの居場所

佐用町の「Full House (以下、フルハウス)」は、令和5年8月に始まったばかりの子ども食堂です。おなかも心も満たされる、ほっこりする居場所を目標に、さよう子育て支援センターで小中学生とその保護者を対象に開催しています。最初は数人程度だった参加者も、5回目の実施では定員の20人が予約でいっぱいになっています。

■ 地域みんなが子どものことを考える

フルハウスを立ち上げた中野裕美^{なかのひろみ}さんは、町内でまちの子育てひろばコーディネーターや家庭児童相談員として働きながら、子どもに関わるボランティア活動もしていました。生活困窮やひとり親の世帯、ヤングケアラーの実情に触れ、支援に携わる中で「子どもの成長を支える地域活動をしたい」と思いを膨らませ、定年退職を機に子ども食堂を始めました。運営の協力を呼び掛けたボランティア15人の中には、中野さんのボランティア仲間である調理員や保育士、管理栄養士、ケアマネジャーも参加しています。また、フルハウスの開催は町役場の防災行政無線で広く呼び掛けられるとともに、町社協や福祉専門職から個別に声掛けされています。

月1回、土曜日の11時30分から13時30分にオープンし、ちらし寿司やカボチャサラダなど子どもの好きなものを、栄養のバランスを工夫しながら提供しています。食材は、地域の方から寄せられた野菜やお米のほか、町社協のフードドライブに寄付のあった調味料や油、お菓子などを活用しています。大人の参加者には100円以上の寄付をお願いしています。これには、寄付をすることで自分たちも子どもたちを支える一助だと思ってもらいたい、という思いが込められています。「フルハウスの活動を通して、皆が地域の子どものことを考えて、支えてくれていると実感しています。佐用町の人たちの温かさを改めて感じています」と中野さんは笑顔で語ります。

■ 誰でも自由に遊び、学び、話せる場所に

フルハウスは、食事以外にもボランティアが星座や星の成り立ち、宇宙の話について映像を交えて教えてくれたり、自由遊びをしたりして楽しい時間を過ごせる場所になっています。いずれは子どもたち自身にも食事や健康について考えてもらえるよう、栄養や感染症などについて学ぶ機会を作っていくことも検討しています。

フルハウスの立ち上げから関わってきた町社協の担当者は「フルハウスは、町内唯一の子ども食堂で大切な居場所。情報提供やフードドライブなどを通じて、これからも活動をサポートしていきたい」と話します。

中野さんは「今は活動が始まったばかりで課題もあるけれど、ゆくゆくは子育てに不安や困りごとを抱える親子も含め、誰でも来られる場所にしたいと考えています。今後は拠点を増やし、(合併前の)旧町すべてで子ども食堂を開くことが夢です」と目標を語ってくれました。

ボランティアによる
栄養バランスを考慮した
メニュー



自由遊びの時間。
季節に合わせたイベントも
行っています

暮らしを支える地域公益活動を紹介します。

キラリ★社会福祉法人

西宮市社会福祉法人連絡協議会 (ほっとかへんネット西宮)

法人の種別を超え職員同士の顔の見えるつながりを目指して

令和元年7月に設立した「西宮市社会福祉法人連絡協議会」(以下、ほっとかへんネット西宮)は、市内の29法人が参画しています。

今回は、ほっとかへんネットの取り組みの1つとして、若手・中堅職員を対象とした交流会活動を紹介します。

職員同士のつながりから、
新たな地域の活動が
生み出されることが
期待されます

ほっとかへんネットの 立ち上げに向けて思いを共有

西宮市では、平成31年から、法人同士の意見交換や委員会ではほっとかへんネットの立ち上げについて協議をすすめました。

その中で、ある法人代表の口頃からつながりがあったから阪神・淡路大震災を乗り越えることができたという経験を踏まえて、①災害・防災に関する委員会活動、②地域福祉計画などの研修活動、③交流会活動(以下、交流会)を行うことにしました。

交流会により、日々の活動の連携やほっとかへんネットの活動基盤となる「顔の見えるつながりづくり」を目指しています。

今後を見据えた 楽しい交流会の工夫

交流会は、令和元年度から年に1回、若手・中堅職員を対象に開催しています。企画・運営には、事務局だけでなく、自ら積極的に協力してくれるメンバーが参画してくれています。

令和5年度の交流会は、他法人の方と交流する機会が少ない若手職員に多く参加してもらおうと、

まずはパラリンピックでも行われているボッチャを楽しみ、その後に、懇談会を行いました。

ボッチャはみんなが気軽に参加でき、職員同士の距離を縮めるだけではなく、各法人での利用者とのレクリエーションにも取り入れることができるため、職員にとって学びの機会にもなりました。

ボッチャをした後は、「ほっとかへんネットで今後してみたい『夢』」をテーマに話す時間を設けました。職員からは「困った時いつでも誰でも相談できるバーを作りたい」「楽器が得意なメンバーで音楽レクリエーションをしたい」といった、みんなの「やりたい」話で花が咲きました。

また、交流会である若手職員が利用者への対応についての悩みを打ち明けると、実は他の職員も同様の経験をしていたことが分かり共感と工夫の共有がされるなど、みんなの前に向かって進む場ともなっています。

若手職員からは「同世代の新しい仲間ができてよかった」との声も聞こえ、ほっとかへんネット西宮の事務局を担う市社協の中川俊亮さんは、「つながることで笑顔になり、日々の業務で課題があつ

てもみんなに相談したり、一緒に乗り越えたりすることができるよう。今後は地域の中で施設の利用者や住民との交流の場を増やしたい」と目標を語られました。
今後は、ほっとかへんネットでの「顔の見えるつながり」から、法人同士がさらに連携し、新たな活動につなげていくことが期待されます。



交流会の様子

ほっとかへんネット西宮
事務局・西宮市社会福祉協議会
TEL:0798-61-1361

生活福祉資金担当者を対象
にスキルアップ研修を開催

令和2年3月から2年半にわた
り実施してきた新型コロナウイルス
S特別貸付の返済が昨年1月から
開始されました。依然として市町
社協の窓口には生活に困難を抱え
る人からの多くの相談が寄せられ
ています。このため生活福祉資金
の相談場面で求められる姿勢、生
活困窮者支援の手法や考え方を学
ぶことを目的に県内社協の生活福
祉資金担当者、ほっとかへんネッ
トワーカー※および担当職員
を対象に、「相談支援スキルアッ
プ研修」を実施しました。

研修は7月から10月にかけて3
日間の日程で、全3日間を通じて
講師を務めていただいた龍谷大学
社会学部の山口浩次教授からは、
相談者の困りごとを受け止めたう



山口教授からは現場職員に寄り
添った講義が行われました



窓口で相談者に何を聞くのか、参加者自身の
事例を持ち寄りて学びました

えで、適切な支援策を提示するた
めには「アセスメント」が重要で
あると解説がありました。

また、日頃のアセスメントを振
り返る機会として、事例を持ち寄
り、事例検討を行いながら参加者
同士の学び合いを深めました。管
理職に向けたプログラムでは、貸
付対象とならない相談や組織内連
携、人材育成の取り組みの必要性
などを、意見交換を交えて学びま
した。

参加者からは「相談者の困りご
とや生活実態を把握し、寄り添っ
た支援を行いたい」「管理職員を
含めた職員全体が一緒に成長しな
がら取り組みたい」などの感想が
寄せられました。社協内部だけで
なく、他機関とも連携しながら、
生活困窮者への支援体制を強化し

ていく重要性が確認されました。
※ほっとかへんネット
ワーカーについては
2023年7・8月号
で紹介しています。



令和6年度介護支援専門員
研修の概要について

介護支援専門員の資格更新に必
要となる法定研修の受講申請期間
等は左表の通りです。

記載内容は、全て令和5年12月
時点の予定です。

詳細は、兵庫県福祉人材研修セ
ンターのホームページでご確認く
ださい。

研修名	研修日数 (研修時間)	受講申込期間	研修実施期間
更新研修B 再研修	9日間 (54時間)	令和6年1月22日 ～2月14日	令和6年4月10日 ～8月22日
専門研修I 更新A (前期)	9日間 (56時間)	令和6年1月25日 ～2月19日	令和6年4月17日 ～7月26日
専門研修II 更新A (後期)	6日間 (33.5時間)	令和6年7月23日 ～8月14日	令和6年10月8日 ～令和7年2月26日

寄付・寄贈について

県社協では、県民・企業・団体
の皆さまから預かった寄付や寄贈
を、地域福祉の向上に役立ててい
ます。今号では、令和5年10月以
降に温かな善意をお寄せいただい
た企業・団体について紹介します。

■三元会兵庫支部様より、県
社協への寄付

■株式会社ツルハホールディ
ングス様ならびにクラシエ
株式会社様より、県内市町
社協に車いすの寄贈

■一般財団法人近畿陸運協会
様より、県社協への寄付

温かな善意に対し、ここに感謝
申し上げます。

社会福祉分野での活用を前提と
した寄付・寄贈、社会貢献をお考
えの企業の方は県社協企画部(☎
078・242・4633)まで
ご連絡をお願いいたします。

寄付・寄贈については、
県社協ホームページでも
ご紹介しています。



外国人との共生を見据えて
考える福祉人材の確保

県社協・社会福祉政策委員会では、11月24日、神戸市内で福祉関係者約70名の参加を得て「令和5年度社会福祉情勢セミナー」を開催しました。

このセミナーは、福祉を取り巻く最新の情勢を学ぶことで政策提案力を高めることを目的に、平成29年から実施しています。今年度は、福祉現場の人材不足を背景に、外国人技能実習生の受け入れが進みつつあることを踏まえ、「これからの福祉・介護人材の確保と外国人との共生」をテーマに開催しました。

セミナーの冒頭、県社協のひょうご外国人介護実習支援センターから、技能実習制度の概要をはじめ、監理団体であるセンターの役割、他制度との比較、また人員配置基準上の取り扱いや具体的な費用など実習生を海外から受け入れる定着させるまでの流れが紹介されました。

続けて、実際に海外から人材を招き入れている、社会福祉法人陽気会とNPO法人福祉サービス経

営調査会から、海外から人材を受け入れた経緯、文化や習慣の違いを乗り越えながら、育成・定着に向けた取り組みを進めることで見えた課題や今後の展望が報告されました。

セミナーの後段では、厚生労働省で要職を歴任された、社会福祉法人恩賜財団済生会の炭谷茂理事長による記念講演が行われました。「これからの福祉・介護の展望」と題した講演では、高齢・障害・児童・生活困窮など、各分野で顕在化した課題が提示されると同時に、その解決や福祉・介護の発展への糸口として、ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）の考え方や、地域共生社会の実現に密接に関わるソーシャルファームの実践が、国内外の事例を交えて紹介されました。

福祉人材の確保に向けても、また地域福祉の充実に向けても、一人一人の違いを認め合い、共生できる環境づくりを目指す重要性を共通項として見いだせたセミナーとなりました。

福祉人材の確保に向けて
「福祉の就職総合フェア」のご案内

福祉人材センターでは、福祉の仕事に興味・関心をお持ちの方に、福祉の仕事の紹介・斡旋をはじめ、資格取得に関する相談などに応じています。

今年度2回目の開催となる「福祉の就職総合フェア」が、3月2日、神戸国際展示場3号館にて開催されます。

福祉施設・事業所との面談のほか、福祉・介護の仕事の魅力を発信するコーナーを設けます。

福祉の就職総合フェア チラシ

今回は、「介護」×「美容」をテーマとしたトークイベントを行います。現在、注目されつつある「介護美容」。他業界から転職された経歴をもつ講師の方をお迎えし、美容を通じて福祉の仕事の魅力をお話しいたします。

トーク後は、介護美容を体験できるブースも設置予定です。お仕事をお探しの方はもちろん、施設・事業所の方もぜひご参加ください。お問い合わせは、福祉人材センター（☎078・271・3881）まで。

